

# 郷土室だより

第97号

平成9年10月31日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 09-039

## 中央区の「橋」

(その7)

◇ 天の浮橋

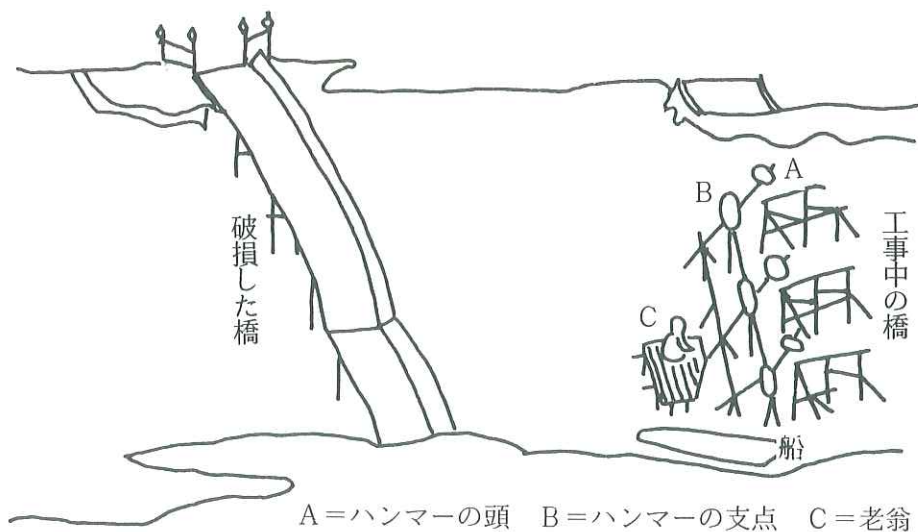
前号の表紙に引用した「夢の浮橋」(永代橋破損之図)を書いているときに連想したのは『古事記』の最初の部分にある「天の浮橋」のことでした。

天の神に「このただよえる国を修め理り固め成せ」と命じられたイザナギとイザナミの男女二神が、「天の浮橋」の上立って、矛を橋の下の「カオス」に突っ込んで「塩許々袁呂々邇」かきならして、引きあげると、矛の先の塩のしたたりが、やがて陸地になったという、日本創造の神話のはじまりの部分です。

つまり「なにもない」ところに橋があったわけですから、日本人と橋のつきあいはずいぶん分久しいわけです。

はし||端といえは「へり」、「ふち」、「中心から遠い、外に近い所」を意味します。その境いに「ほかの場所」に渡るために作られたのが発音も同じ橋という工作物でした。さきの「天の浮橋」も神と「カオス」||混沌との境いにほかならなかったわけですね。

たしか「一休頓智嘸し」に、ある貴人に招待された一休が、その館に行くとき、門前の橋の前に「このはしわたるへからず」という立札。一休はためらわず橋のまん中を平気で渡って主人に会う。主人はあの立札が目に入らなかったのかと問うと、「橋の端を通るなというご注意だと思っただから、橋の中央を渡ってきた」という返事をして、その頓智ぶりを発揮したという「はなし」があるくらいに、橋は端であり、



A = ハンマーの頭 B = ハンマーの支点 C = 老翁

『山崎架橋図 (部分)』

端には橋があつたわけです。なお階段を意味する階<sup>はし</sup>きざはし<sup>はし</sup>梯子は、高さの異なる平面の端<sup>はし</sup>きざ<sup>はし</sup>かいを意味するものでしょう。

#### ◇『山崎架橋図』

奈良時代から平安時代は古代における“高度成長期”でした。人々の交通も盛んになり、そのために行基や空海といった著名な僧侶で代表される技術によって、多くの橋がかけられ、また灌漑施設や堤防がつくられた時代でした。いずれも、それぞれの部族の勢力圏を決定していた大小の河川の河川にかかわるといふ点で共通していたのが特徴でした。

しかしこの時代の橋の具体的な姿を知る資料は、ほとんどないといつてよいでしょう。ましてや工事中の絵となると、つぎで紹介する『山崎架橋図』がおそらく、わが国最古のものではないかと思われます。

この図は平成五年十月に東京国立博物館で開かれた特別展「やまと絵―雅の系譜―」に展示されたもので、その時の図録の内容をそ

のまま転載することにします。

#### ◎(重要文化財) 山崎架橋図

一幅 絹本着色 縦一〇八・六

横五五・〇 鎌倉時代 十三

世紀 大阪・和泉市久保惣記念

美術館。

山崎橋は、現在の淀川、桂川、木津川の合流点付近に架けられていた交通の要衝であるが、洪水による流失と修復を繰り返していた。本図は近世の書写による縁起により、天安二年(八五八)の修復の際に、宝積寺本尊の十一面観音の化身である老翁が現われ、架橋を成就させたという霊験譚を描いたものであることが知られるが、実景に基づく描写も見られ、名所絵的な要素もうかがえる。作画年代は天福元年(一一三三)の十一面観音立像の復興から、ほど遠くない頃と考えられている。

画面は俯瞰により、下半分に架橋の有様、上半分に宝積寺の伽藍が描かれ、件の老翁の姿は橋の手前の袂<sup>たもと</sup>に見出される。やまと絵の手法による山々の穏やかな自然描写が見事だが、全体の構図自体は、鎌倉期に流行

した二河<sup>にか</sup>白道<sup>びやくどう</sup>図との関係も指摘されよう。

というものです。

実は私はこの絵を見るのは二回目、前の印象が強かったので改めて見直すつもりで出かけました。ところが実物は全体が茶褐色のもので展示ケースに額を押しつけるようにして眺めても橋掛けの部分がよくわかりません(確かその時の博物館の展示場所は曲り角の小部屋で、独立したケースに入っていたので、余計に条件が悪かったのかも知れません)。

改めて求めてきた図録をスライド写真に撮って拡大してみたのですが、あまりよくわかりません。そのうちに図録の写真に光を斜めに当てると、印刷インクの違いで、色と形が判別できることを発見して、セロハン紙の上にその形をなぞったものが、表紙に見るように略図のような線画です(ただし架橋部の部分だけ)。

#### ◇橋杭は打ち込みか

この線画を、それなりに説明す

ると、左側の山崎橋は手前の方が折れた形に描かれていて、明らかに破損していることを物語っています。

注目したいのは右側の部分で、三連の橋脚が描かれ、同じく三連の“打ち込み設備”が描かれています。私なりに解釈するとBを支点とした長い柄のハンマーがあり、その先にはAのような“金槌の頭”状のモノがついています。例えていえば児童公園によく見かける“ギタン・バックン”を大形にして、橋杭の頭をたたけるようにしたような道具です。

Cは多分、国立博物館の解説にある宝積寺の十一面観音の化身の老翁で、三連の“打ち込み設備”を一人で操作しているようです。本当は国立博物館の絵画の専門家、ここまで踏み込んで解説してほしいのですが、少なくとも私はこの部分は橋杭の打ち込み図だと思ふのです。

なにはともあれ、架橋中を描いた絵そのものが珍しいものですし、その絵の中にこのような線画が見られることは、さすがに「重要文化財」に指定された絵だという感

じがします。

◇組み立て式橋脚

しかしこの十三世紀の絵を見ると、橋杭とそれを打ち込むハンマーに使われた木材は、かなりの大きさ（長さ）であると考えられます。

このような巨木が容易に得られない——いいかえると巨木があっても、それをこの連載の（その1）でふれたように、必要な場所まで運べなかった時代では、ある規模以上の大きさの橋やその橋杭の大きさは、どんなものだったのでしょうか。

その点で印象に残っているものに、昭和五十三年十月に発見された橋の遺構の新聞記事と写真があります。

「奈良時代の橋、発掘」

○〇年のタイムトンネルを抜けて出土した。場所は神戸市の国鉄新幹線西明石駅東。下水処理場建設のため、この吉田南遺跡を事前調査中で住居跡などが発掘されていた。橋の遺構は丸

太百数十本のワク組み、古代の土木技術が明らかになる。

（『読売報道写真集 一九七九』 読売新聞社刊）

この報道のその後の事情は知りませんが、写真で見える限りでは一本の木材の太さ・長さは一〜二人で持ち運べる程度のもので、ワク組みの有様も比較的によくわかります（ワク組み構造のことは、ここではくわしくふれないことにします）。

◇集積「材」の技術

この報道写真から連想されたのは、古代の地中海文明圏などに多い石造物、とくに石造アーチ橋などの石材の大きさも、少人数で運搬可能なものが多用されていることとです。

もちろんそれは、時代や場所にもより、また宮殿や王者の墳墓などの用材の大きさと別に、庶民用の施設の場合であることはいうまでもありません。

さらに中国文明圏の場合は、規格化された煉瓦で、大建造物のほ

どんが構成されています。

そうした意味では、木造・石材・土材（煉瓦）などの素材が何であれ、少人数で運搬できる小さな素材で、大きな建造物をつくる「技術」は世界共通のようでもあります。

◇目黒の太鼓橋

はなしは江戸時代の日本の橋のことに飛びます。九州地方とくに肥前・肥後・薩摩地方（長崎・熊本・鹿児島各県）には、いまでも石造アーチ橋が数多く現存しています。

長崎市内の目鏡橋、熊本の通潤橋、灌漑用の巨大な「水道橋」などが観光の目玉にもなっています。また熊本市の北方の小天地区、夏目漱石の「峠の茶屋」の舞台でもある、広大なミカン畑の石垣もまた見事な技術といえます。

こうした石積み技術は加藤清正が築いたという熊本城の美しい城の石垣のつくり方と関係があるとされています。

その石造アーチ橋が、現在も洪水常襲河川である目黒川に作られ

ていた時期がありました。

おなじみの『江戸名所図会』（第三巻）には、見開きで「太鼓橋」の絵があり、

太鼓橋 同所（注 いまのJR目黒駅辺）坂下の小川に架せり。目黒川といへり。柱を用ひず兩岸より石を畳みだして橋とす。ゆゑに横面よりこれを望めば、太鼓の胴に髣髴たり。ゆゑに世俗、しか号く。享保（一七一六一三六）の末、木食上人（心誓をいふか）これを制するとなり。

と書いてあります。当時の江戸の南部の行楽地であった目黒不動に詣でる道筋にふさわしく、大口のスポンサーがいた結果の「目鏡橋」だったようです。

この石造アーチ橋の技術は、明治になってから、都心のとくに中央区内の主要な橋のほとんどに取り入れられました。現在では区内には常磐橋、区外では皇居正門入口の俗称「二重橋」だけに残っています。

なお、そのことは稿を改めてふれる予定です。

## ◇橋の大敵

昔も今も橋の寿命に最も影響を与える要素は、洪水・高潮—江戸時代の表現では①「出水・満水」と、②橋脚に船が衝突することでした。もっともこの船の衝突は平常時のことで、「出水・満水」の時に流されてきた漂流物が橋脚に衝突する場合も、その影響はほぼ同じだといえます。

そして③として、これまで述べてきたような「経年変化」—橋材の老朽化・虫喰い・腐蝕などがあるわけです。

さらに④として、大火による焼失も非常に多かったのですが、これは「火災都市」江戸の全体的なことなので、ここでは除外することにします。

その中でなんとといっても、直接目に見える形で橋が破壊される経過が見られるのは、①と②の場合です。

①の「出水・満水」によって河流の勢いが、橋杭に当って震動を起し始めると、今でいえば「橋梁流出注意報」が出され、いよいよ

危険になればそれが「警報」に変わるの、現在の気象情報と同じです。

## ◇震ぎどめ

この橋の「ゆらぎ」を防ぐ準備と方法がどんなものであったかを、延享二年（一七七五）十月の両国橋水防請負人三右衛門が、幕府当局に差し出した文書で見ることができます（例により「内は原文通り、他は読みやすくしました」）。

「両国橋大川満水の節、御橋震キ候程の出水」の時は、橋の上に重り石を置いて流出を防ぎます。この重り石は十貫目以上の石（約四〇キログラム）を千個（約四〇トン）を私の負担で用意しております。その石の置場は橋の東西の橋台地です。

「満水」の時は私の負担で人足を差し出して、橋の上にこの石を並べ置かせます。

なおそれだけではなく、芋綱三筋、縄綱大小一〇筋、しゆる縄三筋、松綱大小三筋の四種類十九筋（本）のロープと、そのロープを使うための巻轆轤一、

しやち一（しやち〓車地、巻ろくろの小型のものか？。ともに現在のウインチロープの捲き取り機のこと）。

さらに橋脚に漂流物が当たるとを防ぐための大鳶口一〇、長鳶口五、長柄鎌五、木廻し五。梯子二、作業隊の目印として高挑灯四、轆二本を準備してあります（引用者注〓出水時に舟を使って橋脚防護をした部分と、防火要員の記事は省略します）。

大水で橋が「ゆらぎ」出すと、橋がひとたまりもなく壊れてしまうために、橋に重りをのせてそれを防いだことがわかります。

また時代と橋によっては石の代りに四斗樽を用意していて、使う時は水を入れて重りにした記録もあります。その点では重りに石だけを用意したという両国橋のケースの方が珍しいようです。

## ◇縄と綱

震キ止め用のロープの芋綱の芋はカラムシ〓ちよま〓芋麻の繊維で作った綱、ちなみに芋は木綿以

前の代表的繊維です。縄綱の縄と綱の区別は縄は細長く撚ったもの、綱は太く長く撚ったものという感じがありますが、具体的にはよくわかりません。しゆる縄は現在も見ることができませんが、松綱は松皮で作った綱ですが、これらの綱と縄をどのように使いたのかは、いろいろ調べてみたのですがよくわかりません。あえて四種類のロープにふれたのは、このシリーズの主な「柱」が、素材にこだわるところから出発したためです。さらにこの綱と縄の長さに関しては、長いのは三百尋、短いのも百尋位のも物が普通だったようです（一尋は約一・八m）。

現在の運動会で使われる綱引用のロープでもせいぜい五〜六〇メートル、それでもその重量は随分有ります。

どのような繊維をどのように撚って、どのように運び、どのように引き伸ばして使ったのか？。いまはあまりにもわからないことが多くなっています。

（鈴木理生）